

平成30年度第3回医学情報センター貴重書展示

医の

こころ

醫とならば、君子醫となるべし。小人醫となるべからず。君子醫は人の為にす。人を救ふに志專一なり。小人醫はわが為にす。我身の利養のみ志し、人を救ふに、志專ならず。醫は仁術なり。人を救ふに志すべし。之、人の為にする君子醫なり。人を救ふに志しなくして、只、身の利を以てとるは、之、人が為にする小人醫なり。醫は病者を救はんための術なれば、病家の貧富はやくくべし。病家より招きあらば、貴賤をわかたず、はややくくべし。人の命は重くおもし。病人をおろそかにすべからず。是、醫とされる職分をつとむるなり。小人醫は醫術流行すれば、我身にはこりたかぶりて、貧賤なる病家などる。是、醫の本意を失へり。

病メシ者ヲ見テコレヲ救ハムト欲スル情意。是即醫術ノ由テ起ル所ナリ。今モ仍醫宜ク此心ヲ以テ下スベシ冀クハ医術純正貴ニシテ而シテ施入者ニ受クル者モコレヲ真直得ム。他ノ為ニ生ジテ己ノ為ニセズ是即業ノ本躰ナリ。故ニ安逸利ヲ歎娛快樂損ナシテ健全生命ヲ不顧ズ。更ニ名誉ヲサエモ擲ツテ其最貴ノ目的ニ従事スベシ。目的トハ何ゾ。他ノ生命健康ヲ保全スルノ一途ノミ。

医学情報センター 1階

平成31年1月28日(月) ~ 3月29日(金)

医師のあるべき姿、守るべき倫理は、古来から繰り返し語られてきました。時を経ても、その言葉は変わらず、「医のこころえ」を教え続けています。

今回の展示では、偉大な医学の先人が書状や著作に残した「いましめ」を紹介します。

◇展示資料◇

杉田玄白自筆書状

15×138 cm（巻紙）文化13（1816）4月25日付弟子宛書状

「玄白いましめの文」といわれるもの。

玄白が親しい弟子に宛てて、贈り物にお礼を述べ、あわせて治療の秘訣を料理に例えて、丁寧に論じた長文の書状です。玄白の死のちょうど一年前、84歳の時に書かれたもので、末尾に「老年で根気がなくなったため、三度に分けて書いた。文が前後しているであろうから、よろしく判読してくれるように」とあるとおり、3回に分けて書き継がれています。

医戒（済生三方附録）

（独）扶歇蘭度[フーヘランド] 原著 杉田成卿 訳 嘉永2（1849）刊（天真蔵版）26×18 cm
原本：C.W.Hufeland 原著の蘭訳本「Enchiridion Medicum 1838」からの重訳

ドイツの内科学者 Christoph Wilhelm Hufeland（1762—1836）の著作「医学便覧 Enchiridion Medicum」を杉田玄白の孫である蘭学者杉田成卿が翻訳したもの。

「医師の義務」の章が「医戒」として翻訳され、医師のあるべき姿を示しています。

医師は、自分の為ではなく他人のために、この世に生をえている。これこそが、医という職業の本体である。それゆえに、医師はただに安逸、利益、歓娛、快楽を捨てるだけでなく、自分の健康や生命も省みず、さらには自分の名誉さえも投げ打って、他人の生命と健康を救うという、最も高貴なる目的に一途に従事しなければならない。

養生訓 1冊

貝原 篤信 [益軒] 著

[京都] 永田調兵衛 正徳3（1713）刊 22.5×15.5 cm

第6巻の「扱医」の章で、医師としての心がけ、医学の学び方などについて、述べています。

医者になるならば、君子医といわれる医者になるべきだ。小人医になってはならない。君子医は、人のために尽くす。もっぱら人を救うことを志す。これに反して小人医は自分のためにするばかりである。自分の利益ばかりを求めて、人を救うことに専一ではない。医は仁術ではないか。人を救うをもって志とすべきである。

【参考文献】

- ・横浜市立大学医学情報センター古醫書目録／大島智夫編、横浜市立大学医学情報センター、1998.10
- ・杉田玄白史料解題 日本医史学雑誌,8(3・4),3-43,1958
- ・養生訓／貝原益軒著;伊藤友信全現代語訳,